

## 7. 消化器癌手術後に発生する肝転移の予防的治療

第2外科\*, RI施設\*\*

笠木徳三\*, 田澤賢次\*, 藤巻雅夫\*, 前田正敏\*\*,  
本田 昂\*\*

消化器癌の手術後に発生する再発の中で、特に肝転移による再発に対し、予防的な治療を種々の biological response modifier を用いて検討した。このうち、OK-432 の実験的肝転移に対する抗腫瘍効果について若干の知見が得られたので報告する。OK-432 の投与は経口、門脈内の2方法について実験を行った。門脈内投与により約36~41%、経口投与により約53%の転移抑制を認めた。また、経口投与については、中鎖脂肪にてエマルジョン化して投与することで、吸収増強と転移抑制の増強を得られることが認められることが認められた。以上より、臨床での効果が期待されている。

## 8. 放射線ホルミシス—微量放射線の生物刺激効果について

RI施設 本田 昂

一般に電離放射線の低線量域における生物学的影響は、高線量域でみられるものと同様であろうと考えられている。しかしながら、近年、低線量被曝は生体に刺激作用をおこすという放射線ホルミシスの概念が提唱されている。ホルミシス線量は、発育の促進、疾病および余後の放射線に対する抵抗力の上昇、生殖能力の増大および寿命の延長を生じさせるという。即ち放射線ホルミシスは、既知の有害線量からゼロへの直線的外挿の妥当性を否定するものであり、従来の放射線科学のパラダイムとは相容れないものであるが、ホルミシス効果を示すデータは無視できない知見と考えられる。

低線量域における放射線生物作用を中心に放射線ホルミシスについて紹介した。

# 第16回 富山医科薬科大学血管懇話会（記録）

## 皮膚リンパ管の構造と機能

Daroczy Judit, M. D.

Semmelweis大学医学部

Kallai-Eva皮膚科病院院長

皮膚真皮に分布するリンパ管の微細構造と機能について述べた。リンパ管の形態学的特徴として以下の5点を挙げるができる。① 薄い内皮を有する脈管である。② 基底膜を欠くか、存在しても不連続である。③ 内皮細胞の overlapping がある。

④ 内皮細胞間に open junction を認めることがある。⑤ anchoring filament の存在。⑥ 弁の存在。これらのうち①は脈管としての必要条件であり。②~⑤はリンパ管の特徴である拡張能力を形態学的に裏づけている。⑥は one way drainage system としてリンパ液の逆流を防ぐための構造で、演者は形態学的にこれらを集合弁、分節弁、単細胞弁、皺襞弁、及び流入弁の5型に分類した。これらの弁はすべて内皮細胞の折り返しからなっており、必要に応じて新たに形成され、あるいは消失を繰り返していると考えられる。

（第1病理，岡田英吉記）